2025年(令和7年)11月21日　北信ローカル　P.8

成長、学ぶ機会を奪わないように

中野小で吃音学習会

支援の在り方考える

皆川さん（正面）の体験や内藤さん（右）の説明を聞いて理解を深めた学習会

県特別支援教育研究連盟難聴・言語障害教育部会の第1ブロック（飯山小・中野小・須坂小）は16日、中野小学校で吃音学習会を開いた。

吃音は、言いたいことが頭に浮かんでいても言葉がスムーズに出せない症状。一般的に「どもる」ともいう。須坂市以北にあたる同第1ブロックでは2011年度から、吃音のある子どもたちを支える大人、児童が集える機会をと学習会を開いている。

このうち大人の会には、言語の面で心配のある子どもが通う「ことばの教室」に吃音で通級する児童の保護者、関心を持つ教員、保育士、保健師、入学前相談に関わる教育委員会担当者らが参加。神應透析クリニック（松本市）の言語聴覚士・内藤麻子さんと吃音のある皆川裕己さんを講師に、対話しながら吃音について学び考えた。

内藤さんは、吃音の話し方や進展、子どもたちとの接し方など、実例を交えて説明。その中で、発言の場で「代わりに言ってほしい」「あてないでほしい」という意思表示は「その場にいたい」「自分の役割を果たしたい」という思いでもあるとし、「気持ちを受け止め、ただ、その子がやらなくていいのではなく、その子の成長、学ぶ機会を奪わないように」と支援のポイントや配慮について助言。子どもへの愛情から先回りや前のめりがちな言葉がけを少しこらえ、共感を大切に子どもの力を信じて温かく見守ること、その子自身が言葉を紡ぐ経験を積ませることも大事と説いた。

特別視せず自然に

皆川さんは当事者の視点から、小中学生時代の授業での発言、受験や就職での面接、一人暮らしに関わる電話での手続きなど、社会人になるまでの体験談や悩んだことについて語り、「話すことへの不安が年齢を重ねるごとに大きくなり、人生の選択を狭めてしまっていたように思う」「苦しいのは発した言葉そのものでなく、言葉に詰まった自分を責めたり、これから発したい言葉が出ないかもという不安」と吐露。

吃音のある人との接し方や支援について、理解する人が周囲にいることが心強く、「どもる話し方には待ってもらうことと、せかさないでほしい。特別視せず自然に接して」。また、当事者自身も「小さな頃から吃音について話し、辛い経験でも話したり付き合い方を模索していくことが大事。吃音があっても話してきた経験は自信にもなる」と語った。

これに内藤さんは「吃音のある人だけが苦労するのでなく、安心して一緒に生きていける社会づくりが大切では」と参加者に呼びかけた。